「佐仁小学校の佐仁八月踊り伝承活動の取組」

１　学校名

奄美市立佐仁小学校

２　学年・人数

全児童（計９人）

３　日時・場所

⑴　練習の日時・場所

ア　練習の日時

（ｱ）　令和３年４月～令和４年３月（朝の会）

（ｲ）　毎月第２，第４土曜日（19：00～　校区合同の練習会）

イ　練習の場所

（ｱ）　各学級

（ｲ）　佐仁校区福祉館

⑵　発表の日時・場所

ハチガツクンチ（10月14日（木）　佐仁厳島神社）

※　その他の発表は新型コロナウイルス感染症の影響ですべて中止

４　伝承・活用に取り組んでいる郷土芸能，伝統的行事について

⑴　名称

佐仁八月踊り（さにはちがつおどり）

⑵　由来

起源は不明であるが，ノロ神の祭式の踊りとして端を発したらしい。そこに村人たちも加わり旧暦８月の丙（ひのえ）を「アラセツ」，壬（みずのえ）を「シバサシ」として，家々を踊り回りながら，火災予防祈願をしたことが由来となっている。その後，五穀豊穣祈願の意味も加わり，グループ形成の踊りに形態を変えながら，現在に至っている。

⑶　構成等

「イソ(衣裳)踊り」を踊りながら最初の家に向かう。チヂンの音を聞きつけた住民が集まり，輪になってシマ唄に合わせて踊り始める。男性が打ち出す歌に女性が歌い返しながら最初はゆっくりと踊るが，途中からチヂンの刻むリズムが速くなり，踊りも激しくなる。２曲ほど踊ると，最後は「六調踊り」で締めくくる。なお，チヂンを打つのは女性と決められているのが佐仁の特徴である。

５　保存会や地域との連携の具体

佐仁校区の八月踊りは県の無形民俗文化財に指定されるなど，文化的価値が高い伝承文化として有名である。一方で近年は，歌いながら踊ることができる後継者の育成が校

区のニーズとなっている。そのニーズに対し，学校では，月１回のシマ唄教室を教育課程に位置付け，シマ唄に慣れ親しませてきた。また，１年間を掛けて慣れ親しませる踊りを三曲指定し，朝の会に練習する場を位置付けることで，日常的に八月踊りに触れることができるようにした。また，校区では，毎月第２，第４土曜日に校区住民が集って練習会を行っている。その練習会に参加するよう，児童と保護者に声を掛けている。新型コロナウイルス感染症の影響で中止となることが多かったが，児童の参加率は高く，本物に触れる機会となっている。

６　文化財伝承・活用の取組の工夫した点

校区のニーズに応え，後継者育成を意図した伝承活動を行うためには，まず，児童に明確な目標をもたせることが必要であると考えた。そこで，「学習発表会で自分たちだけの八月踊りを披露する」という目標を共有した。その際，今年度も校区の方に教わる練習会を開催することは難しいことを伝え，コロナ禍においても目標を達成するための取組について児童と話し合った。その結果，「朝の会で，ＣＤに合わせて踊り唄の練習をすること」「週に１回，９人全員で集まって踊りの練習をすること」「掃除の時間に，八月踊りのＣＤを流すこと」になった。なお，各学級の朝の会における練習は，踊り唄を覚えたタイミングで，歌いながら踊らせる練習にシフトさせていった。

７　取組の様子

朝の会や掃除時間における日常的な取組によって，１学期の終わりには「イソ踊り」「ヤソレノトエトエ」「徳ぬ山岳」の踊り唄を歌えるようになった。そこで，２学期以降は，各学級の朝の会における取組を，踊り唄練習から歌いながら踊らせる練習にシフトさせていった。

【ハチガツクンチの様子】

日常的な取組の結果，10月のハチガツクンチでは，校区住民の輪の内側に児童だけの踊りの輪をつくって踊ることができた。（その他の発表は，コロナ禍の影響ですべて中止となった）。

８　参加児童・校区住民・教員等の感想・意見

４月は言葉が全然分からなかったけれど，毎日の練習や校区の練習会を頑張ったら，おじ・おばたちに「すごく上手になったね」とほめられました。今では，歌いながら踊ることができます。（**児童**）

９人という少人数でありながら，校区の練習会で見るたびに上達していることが分かる。また，ハチガツクンチでも自分たちで小さな輪をつくって楽しく踊ることができていた。大したものだと感心した。（**校区住民**）

コロナ禍にあっては，日常的に慣れ親しませる学校の活動と校区の練習会に参加して本物に触れる機会を増やすことの二本立てで継承活動を行うことが現実的であると感じた。コロナ禍の収束次第だが，来年度は発表の場を多く体験させたい。（**本校職員**）